

## 2210 離島覚書（鹿児島県・奄美大島／宇検村）



宇検村のほぼ全域をカバーする焼内湾 同村HPより引用

令和4年7月12日

### やけうちの宿

瀬戸内町の久慈から山越えの道を走り、焼内湾<sup>やけうち</sup>に向かう。峠の位置に「カンツメの碑」が置かれていた。奄美大島に伝わるシマ唄で、カンツメという娘の哀歌だ。

坂を下った先が宇検村<sup>うけんそん</sup>の名柄の集落である。焼内湾沿いの道を湾奥へと向かう。湾のどん尻が宇検村の中心地・湯湾の集落になる。この日は村の関連施設が集合している一角に置かれている「やけうちの宿」を予約していた。18時すぎに到着した。

夕食は「宇検食堂」で食べた。この食堂は地元の黒糖焼酎の蔵元である(株)奄美大島開運酒造が運営しており、郷土食豊かな内容だった。生ビールと同社が製造している「れんと」というブランドの黒糖焼酎を飲む。

夕食は、豚味噌、島のつけあげ（地元産魚類を原料とした薩摩揚げ）、ピーナツ豆腐、ハンダマ（標準和名：スイゼンジナ）の酢味噌和え、豚耳の燻製、刺身（養殖クロマグロ、サワラ）、油素麺、豚骨うま煮（ブロッコリー、切干大根添え）、天麩羅（養殖クルマエビ、アカウルメ、南瓜、茄子、ピーマン）、鶏飯、マンゴー、黒糖わらび餅、と盛りだくさんだった。ちなみに奄美の郷土料理には琉球料理が色濃く反映されている。

「やけうちの宿」は鉄筋コンクリートの2階建てで、案内された部屋は2階のツインルームである。目の前が焼内湾で、部屋からは湾を一望できる。

この一角には「ケンムンの館」という農産物直売所、村役場の教育委員会、生涯学習センター（元気の出る館）などが置かれている。また、生涯学習センター内には図書室、歴史民俗資料館があり、宇検村の観光、文化、交流の一大拠点になっている。

奄美大島は佐渡島に次ぐ日本で2番目に大きな島である。戦後、奄美大島は、名瀬市、笠

利町、龍郷町、住用村、大和村、宇検村、瀬戸内町の1市3町3村で構成されていたが、2006（平成18）年3月に笠利町と住用村が名瀬市と合併して奄美市となったため、現在は奄美市、龍郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町の1市2町2村に再編されている。宇検村はそのうちの一つなのだ。



やけうちの宿の外観（左）、やけうちの宿と宇検食堂を結ぶ回廊（右）

宇検村は奄美大島の西南に位置し、北に大和村、東に奄美市住用町（旧住用町）、南に瀬戸内町と接する。焼内湾が村域に大きく食い込んでおり、湾に面した小さな集落が村を構成する。

ここで宇検村の歴史を振り返っておこう。

1882（明治15）年の役場区画改正により、現在は大和村になっている志戸勘、今里を含む宇検から湯湾まで（焼内湾の北側半分）を宇検戸長役場（戸長役場とは戸長、つまり戸籍事務の責任者が戸籍事務などを行った役場で村の前身）の管轄とし、焼内湾の南側半分の屋鈍から須古までが名柄戸長役場の管轄となった。1887（明治20）年に志戸勘、今里が大和浜役場方に戻り、宇検と名柄の役場を合併して、宇検役場方として、役場を田検に置いた。

1908（明治41）年に、西方（大島海峡側）の西古見、管鈍、花天、久慈、古志、篠川、阿室釜の7集落（現在の瀬戸内町北部）を含めて焼内村となった。そして役場を名柄に移す。1916（大正5）年に西方の7ヶ村が西方村となって分離され、焼内村役場は名柄から湯湾に移される。翌1917（大正6）年に宇検村に改称され、今日に至っている。

宇検村の1955（昭和30）年の人口は6,337人であったが、2020年国勢調査時の人口は1,621人（805戸）に減少しており、この間に1/4になり、過疎と高齢化が進んでいる。ちなみにこの時点の高齢化率は43.2%で、鹿児島県の市町村別高齢化率では上から4番目に高い。

宇検村の面積は103.07 km<sup>2</sup>で、奄美大島の行政区の中では奄美市、瀬戸内町に次いで広い。しかし村の90%以上が山地で占められており、平地はほとんどない。平地は小河川の流域の沖積地に限られる。奄美大島の最高峰である湯湾岳（標高：694m）は宇検村と大和村の境に位置する。

集落は焼内湾沿いに13あり、内陸部に石良の集落がある。海岸沿いの集落は湾の北端の宇検から時計回りに久志、生勝、芦検、田検、湯湾、須古、部連、名柄、佐念、平田、阿室、屋鈍である。なお、小中学校は阿室、名柄、田検、久志の4集落に置かれている。

各集落別の人口の推移は表1に示す通りである。1915（大正4）年当時、集落ごとの人口

に大きな格差はなく、しかも佐念を除くとおおむね 500 人以上が生活していた。しかし高度経済成長期以降は激減、とりわけ湾奥の中心部から遠ざかるほど人口減少は著しい。

表 1 宇検村の集落別の人口の変化

集落名	1915年	1953年	1978年	2015年	2015/1915
宇検	719	447	166	92	12.8
久志	493	332	82	42	8.5
生勝	474	334	135	56	11.8
芦検	908	613	312	246	27.1
田検	649	359	237	157	24.2
湯湾	1,337	1,006	748	443	33.1
石良		273	153	87	
須古	696	290	157	207	29.7
部連	548	296	69	30	5.5
名柄	586	544	166	132	22.5
佐念	203	183	55	33	16.3
平田	725	429	173	78	10.8
阿室	834	500	124	63	7.6
屋鈍	627	431	68	56	8.9
合計	8,799	6,037	2,645	1,722	19.6

1915、1953、1978 の各年は若林（1981）、2015 年は国勢調査。なお 2020 年の集落別人口は未公表

令和 4 年 7 月 13 日

県道 79 号

県道 79 号を焼内湾南側の先端の集落である屋鈍まで行き、そこから宇検村内の 14 集落を訪ねることにした。県道 79 号は焼内湾の北端の宇検から海岸沿いを通り、名柄から峠を越えて大島海峡側に抜ける。名柄から屋鈍までは県道 627 号になる。

宇検村の各集落をつなぐ村内一周道路が完成するのは 1969（昭和 44）年のことで、それまでは集落間を容易に行き来することはできなかった。主として船で移動していたのである。また通婚関係も集落内におおむね限られていたようで、その結果、集落ごとに独自の文化や方言あるいはシマ唄が引き継がれた。

7 時に朝食を食べ、荷造りをして 7 時 45 分に「やけうちの宿」を出発する。朝早かったのでフロントには人がおらず、部屋の鍵を置いてそのまま出かけた。酒代は別会計になっていたが、島旅から戻ってから昨夜の酒代を支払っていないことに気づいた。すぐに連絡を入れたが、要らないとのこと。後日、奄美大島を再訪した時に支払うことにした。宿を立ち、焼内湾の西外れの屋鈍に直行する。

宇検村も奄美大島の他の町村と同じように集落の中心部に「〇〇集落見どころマップ」と書かれた看板がたつ。また宇検村役場は「シマを探る 宇検村ガイドブックシリーズ」という冊子を発刊しており、宇検村の 14 の集落が紹介されている。また「探しに行こう宇検村のお宝」という集落ごとの絵地図も教育委員会がつくっている。

今なお、村民の多くが、シマ（集落）としての独自性とその歴史に自負の念を抱いている



証拠なのである。

## 屋鈍

湾の先端まで30分強を要し、8時19分に最西端の集落、屋鈍に着いた。ここが事実上の行き止まりである。ここから半島を廻って瀬戸内町の西古見<sup>にしこみ</sup>に至る山道があるが、危険なため通行が禁止されている。

集落の入口付近に「シュノーケリング、レンタル、ソフトクリーム」と書かれた店があった。行き止まりには小さな船溜まりあり、船外機4隻が繫留され、陸域に船外機2隻が陸置きされていた。その手前に「屋鈍共同墓地」と書かれた立派な墓が整備されている。2000(平成12)年に3ヶ所に分かれていた墓地を一ヶ所にまとめたものだった。過疎と高齢化が進行し、墓の面倒をみる人がいなくなったためだろう。後述するように現在では宇検村のほとんどの集落に共同墓地が見られる。

集落内で遇ったおばあさんによると、以前は100戸ほどの世帯があったが、現在は30戸ほどに減少しているそうだ。このうちIターン者が6戸を占めているというから、もともとの世帯は24戸しかないことになる。宇検村は地域活性化のために山村留学を受け入れているが、このIターン者の中に山村留学の子どもがいる。子どもたちは隣の集落にある阿室小中学校に通っている。

屋鈍の集落では背後の山を開墾して段々畑を整備、周辺の山を野焼きにして救荒食であるソテツを植え、自給自足の生活を営んでいた。また、戦前はカツオ釣りが盛んで、漁業により現金収入を得ていたという。

山の麓の屋鈍神社から集落の中心部を抜けて神道<sup>かみみち</sup>があり、海の近くに公民館、さらに海側にノロ(祝女・琉球神道における女性の祭司)が祭祀を司ったアシャゲ(ノロが祭祀を行う神聖な建物)が置かれている。そして公民館の前には屋根付きの土俵があった。宇検村の全ての集落はノロを中心とした祭祀を行うつくりになっており、この集落の在り方は奄美大島の全島におおむね共通している。集落の中を通る神道は、神や神に仕える神女たちが祭祀の時に通るきまった道であり、祭祀の期間に村人がその道を通ることが禁じられている。一人がやっと通れるくらいの狭い道だ。



屋鈍の行き止まり(左)、屋鈍墓地公園(右)

琉球王府から辞令書もらったノロを奄美では「御印加那志」といい、ノロの長となった。この辞令を受けたノロは一切の祭祀権を掌握し、一生のうち一度は琉球の首里に上り、「聞

得大君<sup>えおおきみ</sup>」を拝謁<sup>はいえつ</sup>してノロ任命の朱印書もらった。これをシマ（集落）では「印判」と称し、ノロの家<sup>ノロ</sup>に代々保存されてきた。このように琉球政府が奄美大島を支配してからノロによる祭祀によって集落が運営されてきたのであった。

薩摩藩が奄美に侵攻してからは、ノロの祭祀に対する経費削減や祭の回数を減らすように命じた。しかし、ノロそのものを否定していなかったため、この伝統は今日まで集落の運営に影響を及ぼしているのである。ただ、高齢化や後継者不足からノロ制度はほぼ崩壊しており、その残滓が集落ごとの意識に影響を及ぼしているといえる。

宇検村の公共交通機関は路線バスだ。宇検村の中心である湯湾と屋鈍を結んで(株)しまバスが1日4便運航されている。ただし土日祝日は3便。バス停は各集落の中心部にある。

## 阿室と平田

屋鈍の次の集落が阿室である。集落の規模は屋鈍とほぼ同じだ。

阿室川という小さな河川の谷あい<sup>あいに</sup>に形成された集落である。阿室川を挟んで左岸に阿室小中学校が置かれているが家はほとんどなく、廃屋となってしまったようだ。集落は主として右岸に残されている。阿室の集落にも立派な共同墓地があった。こちらは2012（平成14）年に完成している。

川の上流部には農地があったようだが、現在はそのほとんどが耕作放棄の状態だ。

阿室小中学校の校区は阿室とその両側の屋鈍と平田の集落になる。過疎化で子どもたちが減り、学校の存続が危ぶまれたため、上述したように地域活性化の一環として親子山村留学制度を取り入れている。現在の児童生徒数は20名ほどである。

阿室の海岸に「ベルスーズ奄美の碑」と書かれた石碑が置かれていた。ベルスーズとはフランス語で子守歌という意味らしい。地元阿室出身のファゴット奏者であった山畑馨（2020年に97歳で逝去）がシマ唄をもとに作曲した交響曲で、7楽章からなる。彼の死後、奄美大島の2ヶ所で演奏されたのを記念し、郷土出身の音楽家を悼んで建てられたものらしい。

隣接する平田の集落との間に平田漁港（第1種）が整備されている。阿室と平田の両集落に人たちが利用しているのだろう。漁港内には6隻の漁船が係留され、陸域に15隻の船外機などが置かれていた。また隣の区域にはプレジャーボートが3隻係留されている。比較的漁船数は多く、半農半漁で生計を立てている人が多いのだろう。



阿室小中学校（左）、海岸に置かれている「ベルスーズ奄美の碑」（右）

平田の集落は海岸沿いの谷戸地に形成されており、世帯数は61戸と阿室の2倍ほどに



なる。やはり集落の背後の小さな河川沿いに農地があった。また山を挟んで東側にもかなりまとまった農地があり、牧草地になっているようだった。

## 佐念

平田から海岸沿いの道路を走るが、しばらく人家はない。平田と佐念の集落の間にタエン浜海水浴場があり、「海の家」らしき建物が一棟だけあった。

次の集落が佐念で小さな湾の奥まったところに人家が 10 数戸残る。宇検村の 14 の集落のなかでは最も世帯数が少ない。

集落の西側に区画された農地があった。道路脇に「農地整備完成記念碑」と書かれた石碑が置かれていたことから、最近土地改良されたものであろう。集落の前に小さな船溜まりがあり、ここにボート 2 隻とプレジャーボート 1 隻が陸置きされていた。漁船数からみて、佐念の集落で漁業を営む人はいないのだろう。

この集落には「佐念モーヤ」という古い共同納骨堂が残っている。サンゴ石を積み重ねた共同墓地で、中世のものだ。

火葬が普及する以前の奄美大島には、共同墓として板石墓と積石墓の 2 種類の墓地があった。宇検村一帯には積石墓が多く見られ、サンゴ石灰岩の石塊を積み上げて箱状または半球状に墓をつくった。これらの墓は「モーヤ」と呼ばれた。この佐念モーヤは奄美大島に残る唯一の完全な積石墓で、奄美・沖縄地方の古い墓はこのようなものだったらしい。ちなみに村はこの墓の内部を調査して 31 体以上が埋葬されていることを確認している。

一方、道路沿いに「佐念やすらぎの里」という共同墓地が整備されていた。こちらは現代の共同墓地で、最近できたものである。

9 時 45 分に佐念を出発し、次の集落の名柄に向かう。



佐念モーヤと呼ばれる古い時代の共同墓地（左）、近代的な現在の共同墓地（右）

## 名柄

名柄は焼内湾の支湾である名柄湾々奥に形成された集落である。1908（明治 41）年から 1916（大正 5）年までの 8 年間、旧焼内村の役場が置かれたところで、焼内湾南岸の中心地であった。今でも南岸の集落のなかでは人口が最も多く、100 人（60 戸）が住む。

集落の前面には地方港湾の名柄港が整備され、埋立地には村立名柄小中学校が置かれている。1878（明治 11）年に設立された伝統校である。この小規模小中併設校は名柄と手前の佐念の両集落を学区としている。

集落の入口にこの集落に本社を置く日本マグロ研究所㈱の作業場や社員寮があった。

名柄の集落にも集落のはずれに共同納骨堂が整備されていた。この納骨堂の道路を挟んだ反対側に真珠養殖の管理センターが置かれている。瀬戸内町古仁屋に本社がある奄美サウスシー&マベパール㈱のもので、同社は加計呂麻島の三浦平勝と知之浦、瀬戸内町本島側の手安、そしてこの名柄の沖の合計4ヶ所に養殖場を有している。名柄の管理センターは焼内湾の作業拠点だ。集落の前面の海域に真珠養殖の延縄式施設が置かれていた。ちなみに同社はマベガイの半円真珠とシロチョウガイを養殖している。焼内湾には同社の他にも、対岸で㈱拓洋がマベ真珠の養殖に取り組んでいる。

集落の中央を流れる名柄川の左岸の埋立地は漁船の係留場所となっており、小さな漁船数隻が浮かんでいた。また陸揚げされている漁船も数隻見られた。漁船の数からみて、名柄ではあまり漁業は行われておらず、クロマグロ養殖と真珠養殖が中心である。



名柄集落の全景（左）、奄美サウスシー&マベパール㈱の養殖場（右）

### 日本マグロ資源研究所㈱

今ではトップの座を長崎県に譲っているが、元来、クロマグロ養殖の中心地は鹿児島県であり、なかでも奄美大島が圧倒的なシェアを有していた。そして奄美大島の産地は大島海峡とこの焼内湾なのである。

焼内湾では名柄に根拠地を持つ日本マグロ資源研究所㈱と、対岸の芦検に根拠地を有する㈱拓洋の2社がクロマグロの養殖（蓄養）を行っている。奄美大島のクロマグロ養殖は島外の資本によって営まれているのに対し、日本マグロ資源研究所㈱だけ島内資本のようだ。

この会社は1997（平成5）年に設立された。マグロの蓄養から加工販売するまでを一貫して手がけており、従業員は40名である。漁場は名柄湾の前面で直径30mほどの大型生簀が11基ほど浮かぶ。

名柄の集落の手前に同研究所の作業場があった。付近には誰もいなかったもので、休みだったのかもしれない。したがって取材は叶わなかった。

同社のホームページによると、「養殖」ではなく「蓄養」と書いてあったので、天然幼魚（ヨコワ）を曳釣りの漁師から購入して、40～50kgに育てて販売しているようだ。餌は冷凍の生餌が使われている。取引先に中央魚類㈱の名前がでていたので、豊洲の同社へ主に上場していると思われる。研究所をネット検索していたら、2015年に同社の実質的経営者が餌の購入量を水増しして、脱税で逮捕されていたことが出てきた。クロマグロ養殖はけっこう経営が不安定と聞いているが、こうして儲かることもあったのだろう。





日本マグロ資源研究所の作業場（左）、名柄集落の沖合に広がるマグロの蓄養生簀（右）

## 部連

海岸沿いのくねくねした道をしばらく走ると部連の集落に着いた。集落は海岸線の道路よりも一段低いところに形成されているので、県道 79 号から坂を下って集落に入る。

集落は部連川を挟んだ両側に形成されているが、空き地が目立つ。この集落の世帯数は 19 戸、人口は 25 人で、宇検村の全集落のなかでは最も少なく、過疎化が進んでいる。

集落に入った最初の位置に部連の公民館が置かれ、その前に土俵があった。道路を隔てた反対側に共同墓地である精霊殿が建つ。こちらは宇検村内で第 3 番目につくられた共同墓地で 1997（平成 9）年にできた。

集落の中心地にバス停があり、その脇に民具などを展示した生活資料館が置かれていた。誰もいなかったの、中に入ることはできなかった。さらに納税や社会保険料の納入時期を示す掲示板が立っていた。この種の掲示板を見るのは初めてで、地区住民の納税意識が高いことを示している。あるいは守らない人が多いという事情があったのかははっきりしない。

集落背後の川沿いには比較的広い農地が広がり、一部でサトウキビが作られていた。一方河口の西側に数 10m の短い突堤が整備され、そこに船外機が 1 隻つながれていた。部連ではもともと農業が中心で漁業はあまり盛んではなかったと思われる。

この集落の入口から少し奥まったところに、宇検村で唯一の養鶏場がある。4～5 棟の鶏舎が並んでいた。



部連の集落と前浜（左）、部連集落の中央付近に置かれている生活資料館（右）



## 須古と石良

須古は河内川の左岸に形成された集落で、橋を隔てて宇検村の中心地である湯湾に隣接する。人口は177人、世帯数は139戸で、宇検村のなかでは湯湾について2番目に大きい。ただし、集落内には「特別老人ホーム虹の園」と障がい者支援施設が置かれているので、在来住民だけで見れば、それほど多いわけではない。

焼内湾々奥には小さな船溜まりがある。ここには船外機3隻と漁船1隻が係留されていた。集落の背後には川沿いに農地が広がり、サトウキビや柑橘類がつけられているようなので、須古の集落は農業が中心と思われる。

この集落には19世紀中期につくられた白糖工場の跡が残る。薩摩藩主島津斉彬は五代友厚の提案をきっかけに藩外には内密に大島の4ヶ所に外国人技術者の協力を得て白糖工場を建設したが、そのうちの1つが須古につくられた。その時の石垣が今でも残る。ただし自然災害で工場が一時停止するなどの被害を受け、長続きしなかった。

河内川沿いを上っていくと、石良の集落がある。この集落だけが山村で、石良の他に新小勝と大畑の2つの地区が含まれる。この河内川にはリュウキュウアユが生息するらしい。



河内川河口につくられた須古の船溜まり（左）、河内川上流の石良の公民館（右）

## 湯湾と村役場

河内川と湯湾川に挟まれた扇状地に形成された集落が宇検村の中心地である湯湾だ。宇検村役場、金融機関、医療機関、村営住宅、運動公園などが置かれている。湯湾川の両岸は家が密集し、市街地を形成する。

河内川沿いの県道85号を下って村の中心地である湯湾に入る。村役場に直行し、総務企画課に顔を出し、2010年村勢要覧をいただく。近々、新しい要覧を準備中とのこと。また村内の養殖業の概要を聞いた。

湾奥の埋立地には「やけうちの郷」という観光・文化・交流の施設が集積している。昨年宿泊した「やけうちの宿」、「ケンムンの館」という地元農産品の直売施設、「元気の出る館」という歴史民俗資料館などだ。

「ケンムンの館」は2022年4月にオープンしたほやほやの施設である。店内には冬瓜やカボチャを始め地元野菜が豊富で、パッションフルーツやドラゴンフルーツなどの亜熱帯産の果樹も売られていた。またモズクや冷凍魚などの水産物も扱われている。なお、「ケンムン」とは奄美大島に伝わる妖怪のことである。

ここで宇検村における農林業の現状について整理しておこう。

宇検村の農業はもともと自給作物の甘藷栽培が中心だったが、貨幣経済化が進んだ昭和30年代以降はサトウキビが主要作物になった。しかし1971（昭和46）年に瀬戸内町にあった拓南製糖が操業を停止すると、サトウキビ栽培は一気に縮小、衰退した。代わって果樹栽培がメインとなる。

宇検村は山地が圧倒的に多く、耕地面積は135haと村の総面積の0.1%に過ぎない。田はゼロで米は作られておらず、全て畑である。総農家数は129戸で、自給的農家が圧倒的に多く、主業経営体はわずか5戸に過ぎない。耕種は柑橘類のタンカンとパッションフルーツなどの亜熱帯性の果実が圧倒的に多く、生産額は8,000万円ほどである。これに野菜類の3,000万円、サトウキビの2,000万円が続く。おそらくこの程度の生産規模だと、「ケンムンの館」は販売先として重要な役割を果たしていると思われる。

一方、畜産業は肉用牛の繁殖が約4,000万円（1経営体）、鶏卵が約6,000万円（1経営体）であった。

林野は9,397haで、3経営体がチップを生産している。

運動公園の東には村内で唯一の黒糖焼酎の蔵元奄美大島開運酒造が置かれている。この酒蔵のブランドは「れんと」で昨晚飲んだ。この酒蔵では音楽を聞かせながら黒糖焼酎を熟成させているらしい。

続いて焼内湾北側の海沿いの道路を走り、集落を見学しながら湾口部の宇検の集落に向かう。



宇検村役場（左）「ケンムンの館」の野菜売り場（右）

## 田検

湯湾の次が田検の集落で、宇検村の中心的集落である湯湾集落に隣接する。1887（明治20）年から1908（明治41）年まで、宇検村の前身である焼内村の役場が置かれていた。

こうした背景から集落内には小中学校が別々に置かれている。ちなみに村内の他の小中学校は小規模併設校である。集落をはさんで東側が田検小学校、西側が田検中学校だ。両校ともに広いグラウンドと体育館を有する。

2022年6月現在の田検小学校の児童数は51人、田検中学校の生徒数は25人であった。宇検村には他に4つの小中学校があるが、児童生徒数は20人前後と少ない。名柄小中学校の児童生徒は11人、阿室小中学校は18人、久志小中学校は21人なので、村の中心に位置する田検の小学校と中学校の児童生徒数は相対的に圧倒している。

集落の背後に土地改良により整備された農地がひろがり、ビニールハウスも見られた。タ



ンカンなどの果樹が栽培されている。

宇検村のほとんどの集落には共同納骨堂が近年急速に広がっているが、その先駆けとなったのが田柄集落の共同納骨堂・「精霊殿<sup>しょうろうでん</sup>」である。この施設ができたのは1972（昭和47）年のことであった。この共同納骨堂は集落が所有し管理主体となっている。

江戸幕府の寺請制度によって寺を菩提寺と定め、その檀家になることを義務付けられていた内地では、墓の基本的な管理は寺が行った。しかし奄美群島の場合は琉球王朝の支配下にあり、ノロによる祭祀の伝統を引き継ぎ、風葬が中心であった。このため、奄美大島には寺は少なく、宇検村には一軒の寺もない。そして上述したように多くの人々は集落を去り、過疎化が進むと墓の管理が難しくなる。また風葬から土葬、火葬へと変化するなかで、遺体はすぐに骨になり、骨壺に納められたから管理がしやすくなった。こうした事情が共同化を進めたのであった。

近年、都市部では所属する寺を持たない人が増え、火葬した骨を私設の納骨堂に収める人が増えているが、過疎化が進んだ島ではすでに先駆的に取り組まれていたのである。



田検集落東側の田検小学校（左）、同西側の田検中学校（左）

### 宇検村の水産業

奄美大島の漁業協同組合は4単協に再編されているが、宇検村漁協は昔のままで漁協合併には参加していない。この漁協の事務所が田検の集落に置かれている。

同漁協の2020（令和2）年度末時点の組合員数は正：48人、准：71人の合計119人であった。また令和元年度の漁業生産量は407トン、生産額は1,282万円である。漁協の資料によると、一本釣、潜水器漁業、素潜り漁業、小型定置網漁業、モズク養殖などが営まれている。

2018年漁業センサスでは、宇検村の漁業経営体数は34で、個人経営30、会社経営4という内訳であった。会社経営は、マグロ養殖を営む(株)拓洋と日本マグロ資源研究所(株)の2社、真珠養殖を営むあまみサウスシー&マベパール(株)、クルマエビ養殖を営む宇検養殖である。ただしこの4社は宇検村漁協の組合員にはなっていないと思われる。漁業就業者数は95人で正組合員数をはるかに上回る。したがってこの中には会社に所属する多数の従業員が含まれるものと推定される。

2018年漁業センサスの時点ではモズク養殖は営まれていなかったが、2021年に20年ぶりに復活し、この年は14トンのモズクを収穫している。モズク養殖は8人が「やけうち水産」という組織を立ち上げて生産している。

## 芦検

湾岸道路を進んだ先が芦検の集落である。集落は大良川の河口から東側の谷戸地に形成されている。132戸、245人が住み、須古について村内で三番目に大きな集落だ。河口付近には既存の集落とは別に、村営住宅が建つ。集落前面の砂浜は埋め立て造成され、芦検漁港（第1種）が整備されている。ただ漁船数は少ない。この砂浜では伝統的な待ち網漁が行われている。

芦検川の両岸は沖積地になっており、農地が広がる。

集落に入る手前の県道脇に芦検共同墓地公園が整備されている。田検に続いて1996（平成8）年3月に完成した共同墓地である。上述したように宇検村には共同墓地が多く、ほとんどの集落は共同墓地を有している。これは田検での試みが伝搬したものだ。奄美大島には寺が少なく、本土と異なり墓地の管理は専ら地域で行われてきた。しかし集落から都会に出ていき、若い人が少なくなり、高齢者には墓の管理が大変になると、墓は荒れてしまう。そこで共同墓地が最初に田検に生まれたのだが、各集落が抱える事情は同じだったから、瞬く間に宇検村内の各集落に広まったというわけだ。

芦検と生勝の間に(株)拓洋（本社：熊本県熊本市）の「まるあ真珠事業部」と「種苗生産事業所」が2ヶ所に分かれて置かれている。拓洋はもともと三重県英虞湾出身の養殖業者で、現在はマダイとクロマグロの魚類養殖の事業を展開している。まるあ真珠事業部はマベガイ真珠を生産している。また種苗生産事業所ではナンノクロロプシスとワムシを培養している。同社は奄美市<sup>あしひら</sup>芦花部でクロマグロとマダイの種苗生産に取り組んでおり、ここで生産する稚魚の餌として供給しているのだろう。

芦検の集落前の湾内には真珠の延縄施設が並ぶ。また種苗生産事業所前の海面にもたくさんのお型生簀が並んでいた。これは(株)拓洋のマグロとマダイの養殖生簀と思われる。



芦検共同墓地公園（左）、(株)拓洋のまるあ真珠事業部の施設（右）

## 生勝と久志

生勝トンネルを抜けると、生勝の集落である。小さな河川の東側の狭い谷戸に人家が密集している。世帯数は33戸、人口は59人であり、人口は14の集落中、下から4番目に小さな集落である。

芦検と同じように河口部の砂浜の一部が埋め立てられ、未利用の平坦な土地があり、船溜まりがつくられている。ここに船外機7隻が置かれていた。

生勝の次の集落が久志である。こちらも小さな谷戸地に人家が密集しており、21戸39人



が住む。村内 14 集落の中では部連に次いで下から 3 番目に人口の少ない集落になる。しかし立派な公民館と土俵が置かれ、共同墓地もつくられている。さらに小中学校や郵便局もあり、生勝よりもにぎやかなようすだ。集落の前には突堤が突き出ているものの、港はなく、漁船もなかった。久志小中学校は久志と両隣の生勝、宇検の両集落の児童生徒の通学圏となっている。

久志の集落には後述する枝手久島の石油備蓄基地反対を訴えるヒッピー系の人々が住み着き、「無我利道場」というコミュニン（共同体）ができたことがある。1970 年代にトカラ列島の諏訪之瀬島にヒッピーが住み着いているが、その影響が奄美大島に波及したのだろう。基地建設を巡り、村内 14 の集落は地域振興の観点から推進する集落と環境保全の観点から反対する集落に分かれて対立した。宇検、生勝、芦検、田検、湯湾、石良、須古、部連、佐念は誘致賛成、名柄、平田、阿室、屋鈍は反対の集落であり、久志の集落は集落内で賛否が分かれた。少数の反対派は外部に応援を求め、ヒッピーの一団が久志に移住してきて、原住民との対立に発展し、泥沼化した歴史を抱えている。

両集落の前の海面にはマグロ養殖の円型生簀が数多く並んでいる。



久志集落の公民館と土俵（左）、久志集落の共同墓地（右）

## 宇検

焼内湾北側の湾口部の集落が宇検である。最も湾口部に近い。ここから県道 79 号の山を越えた先が大和村になる。

公共交通は南岸と同様、しまバス(株)が定期バスを運行しており、宇検と宇検村の中心である湯湾を経由して、住用町の新村（上役勝）を結ぶ。平日は日に 4 便、土日祝日は 3 便運航されている。各集落の中心部にあるバス停がある。主に車を持たない高齢者が利用しているようだ。

宇検の集落は小さな河川の河口部を開けた谷戸地に形成されており、46 戸、95 人が住む。1688（元禄元）年から 1887（明治 2）0 年まで、宇検戸長（現在の太和村の志戸勘、今里から焼内湾北側）の役場が置かれていたのがこの宇検の集落であり、かつては行政の中心地だった。

集落に西側に埋立造成された護岸と斜路が整備されており、宇検漁港（第 1 種）となっている。港内には比較的大型の漁船 2 隻と船外機 4 隻が置かれていた。漁船は「第 68 枝手久丸」「第 77 枝手久丸」の 2 隻であり、船には網が積まれていた。漁船の装備からみて小型定

置網と推定される。宇検村の漁港を巡回してきたが、網を積んだ船で、かつそれなりの大きさを有する漁船はこの2隻だけだった。

この宇検の集落からは枝手久島周辺に配置された釣り筏の遊漁船が発着しており、宇検には釣り客が多く訪れるらしい。



宇検の集落（左）、宇検漁港に停泊中の定置網漁船（右）

## 宇検養殖

宇検集落を抜け、さらに倉木崎の先端に向かうと、クルマエビの養殖場があった。

宇検養殖(株)といい、鹿児島市内に本社があるMBC開発と宇検村が共同出資した第3セクターで、1986（昭和61）年10月に設立されている。クルマエビ養殖は一時期ウイルス性疾病が流行って大打撃を受け、経営を断念したところが多いなかで、35年にわたって経営を継続してきたのは立派である。

養殖場の事務所を訪ねると昼休み中だった。養殖場へ行く道を教わり、車で養殖場が見渡せる高台に登った。ちょうどクルマエビの出荷が終わり、池の砂をショベルカーで積み上げ、日光消毒をしているところだった。

養殖場の面積は約7.7haで、小さな入り江をそのまま締め切って養殖場にしたものだ。いわゆる築堤式である。池の中には電柱が等間隔でたくさん立っていた。エアレーション用の水車を廻す電源のようだ。この施設で、年間約60トンのクルマエビを生産している。従業員は18人だが、村民に数少ない雇用機会を提供している。

事務所の近くにクルマエビの種苗生産施設もあり、種苗は自給している。池の消毒を終えた後、8月に種苗を導入し、早いものは年末から出荷が始まる。おおむね4月いっぱいまで養殖を終え、池を清掃して翌シーズンの養殖に備えるというパターンだ。

生産したクルマエビは基本的に活エビで出荷しているが、その他に冷凍品、燻製品も販売している。

岬の手前に「船越海岸」と呼ばれる広い砂浜が広がる。その沖にサンゴ礁が連なる。夏は海水浴客で賑わうようだ。海岸を見下ろす高台には對馬丸の慰霊碑が建っていた。對馬丸は疎開船として民間人や児童1,700人を乗せて沖縄から長崎に向かう途中、米軍の魚雷攻撃を受けて悪石島沖で沈没した悲劇の船だ。遺体の一部がこの船越海岸にも漂着したらしい。悪石島にも慰霊碑が置かれており、以前お参りしたことがある。





池底の砂を天日消毒作業中のクルマエビ養殖池（左）、クルマエビの種苗生産施設（右）

### 枝手久島と倉木崎海底遺跡

焼内湾の湾口部に比較的大きな島が横たわる。枝手久島<sup>えだてくじま</sup>といい、面積は 5.81 km<sup>2</sup>で、与路島（面積 9.35 km<sup>2</sup>）よりも 2 回りほど小さい。現在は無人島であるが、奄美群島のなかでは最も大きな無人島になる。なおこの島は、風葬の習慣が残っていた当時、風葬の島としても知られていた。

戦争をはさんで沖縄県の久高島<sup>くたかじま</sup>出身の夫婦が住んでいた時期もあったが、その後離島し、1951（昭和 26）年以降は無人島になった。1973（昭和 48）年に東亜燃料工業（現 ENEOS）が石油備蓄基地の計画を発表、村を二分する騒ぎとなったことは上述した通りである。この騒動は 11 年間続き、激しい反対運動が展開された。1984（昭和 59）年に同社は計画を断念、枝手久島は再び静かな島に戻った。

現在、島の南側にはマグロ養殖の円型生簀が多数置かれている。湾内でマグロ養殖を営む 2 社のものだが、どちらの会社のものかはわからない。ただ枝手久島が風よけになり、かつ外洋に近いことから排泄物や残餌は外洋に運ばれるので、給餌養殖の場所としては優れた立地条件にある。

また、島の周辺には魚が多いことから、釣り人も多い。このため島の周りの 3ヶ所に釣り筏が置かれており、本島側の宇検から顧客を運んでいる。

対岸の宇検との間は長さ約 2 km、幅 250～600m の海峡になっており、水深は約 3 m と遠浅である。このため大潮の干潮時には歩いて渡ることができるらしい。遠浅であることから、現地の地形に疎い外国船はこの海峡部で座礁したようだ。

1994（平成 6）年 8 月、この海峡の海底一帯に中国製の陶磁器片が多数散乱しているのが発見された。宇検村教育委員会が主体となり、青山学院大学の協力を得て、平成 7 年度から 10 年度の 4 ヶ年に渡って調査が実施された。調査の結果、12 世紀後半から 13 世紀初頭にかけて生産された中国南宋時代の陶磁器約 2300 点が確認されている。陶磁器は浙江省の龍泉窰系<sup>りゅうせん</sup>、江西省の景德鎮窰系<sup>けいとくちん</sup>、福建省の建窰系、同安窰系<sup>どうあん</sup>、磁窰系などの中国南部の製品であった。この遺跡は中世の交易船の積み荷と思われ、船が座礁したため、陶磁器を海に投棄して船を軽くし、離礁したものと考えられている。この時代に大量の陶磁器を日本に輸出していたわけで、興味深いものがある。

この海底遺跡は倉木崎海底遺跡と命名され、収集品は村の歴史民俗資料館に保管、展示されている。



焼内湾湾口に浮かぶ枝手久島（左）、倉木崎海底遺跡から見つかった陶磁器類（右）

宇検の集落から来た道を引き返し、宇検村の中心地の湯湾に出る。途中にマンゴーの温室栽培の施設を見る。

歴史民俗資料館で、ノロに関する展示と倉木崎の海底遺跡の収蔵品を見学し、「ケンムンの館」でパッションフルーツを購入した。同直売所のパッションフルーツは大変安かった。

12時30分に宇検村を出発し、県道85号を通過して峠を越え、国道58号に出る。奄美市住用町を経て、14時30分に奄美大島空港に着いた。空港近くのレンタカー会社に車を返却し、15時20分の奄美大島空港発のジェット機で羽田に戻った。

#### 【文献】

福ヶ迫加那（2014）：奄美大島宇検村における「墓の共同化」, *South Pacific Studies*. Vol.35, No.1. p.1-20.

日高優介・桑原司（2020）：石油基地誘致反対運動のネットワーク的展開。－奄美大島宇検村を事例に－. *経済学論集*第95号. 鹿児島大学. p.105-124.

若林敬子（1981）：奄美大島南部過疎地域の解体過程－宇検村田検－. 「第八章奄美農村の構造と変動（松原治郎・戸谷修・蓮見音彦編）, お茶の水書房, 東京. p.269-340.

高須由美子（2003）：奄美諸島のノロ（女性祭司）関係文書. *史資料ハブノアジアにおける在地固有文書解題*. p.148-158.